

## おはなしレストランの取組

### —読み聞かせによる人間力の育成—

岩 田 英 作

#### はじめに

島根県立大学短期大学部松江キャンパスでは、学生の総合的な人間力の育成を目標に掲げ、平成18年度より絵本の読み聞かせを取り入れた教育を行っている。この取組を総称して「おはなしレストラン」と呼んでいる。宮沢賢治が自分の書いた童話を「すきとおったほんとうのたべもの」（童話集『注文の多い料理店』序）と呼んだのに因んで付けた名称である。この取組は、平成21年度に文部科学省から大学教育推進プログラム（Good Practice）に選定され、それを契機に取組を拡充することができた。おはなしレストランの取組の柱は次の4つである。

#### 【その1】読み聞かせの実践（定期）

キャンパス近隣の幼保園や小学校などで行う読み聞かせの活動で、おはなしレストランのベースとなる取組である。毎週4箇所で開催しており、年間およそ100名の学生が読み聞かせにチャレンジする。

#### 【その2】読み聞かせの実践（不定期）

絵本を携えた学生たちが10人乗りのバン「おはなしレストラン号」に乗り込み、「出前シェフ」として、要望のあった地域・施設に向かい読み聞かせを行うというものである。初めての場所で初めて会う子どもたちを対象に行うことが多く、ドキドキワクワクたっぷりのライブ活動である。

#### 【その3】おはなしレストランライブラリー

キャンパス内に、絵本を中心とする児童書専門の図書館「おはなしレストランライブラリー」を開設し、読み聞かせの資源として活用している。平成23年4月には一般向けにオープンし、貸出も行っている。

#### 【その4】絵本データベース

おはなしレストランライブラリー所蔵の絵本について、あらすじ、おすすめポイント、対象年齢、読み聞かせにかかる時間などをデータベース化し、インターネットを通して誰でも利用できるようにしている。

以上4つの取組のうち、本稿では、読み聞かせの実践（定期）について詳しく報告することとする。絵本の読み聞かせの授業化の実態と成果を検証し、今後の取組

に活かすとともに、地域とかかわる実践型授業のひとつとして参考となれば幸いである。

## 1. 教育目標

読み聞かせの実践では、絵本の読み聞かせを通して、学生の総合的な人間力を育成することを目標としている。ここでいう「総合的な人間力」とは、以下に述べる「知識」「技能」「実践」を総合して育まれる能力を指す。

### 【知識】絵本や人間に関する知識と理解の育成

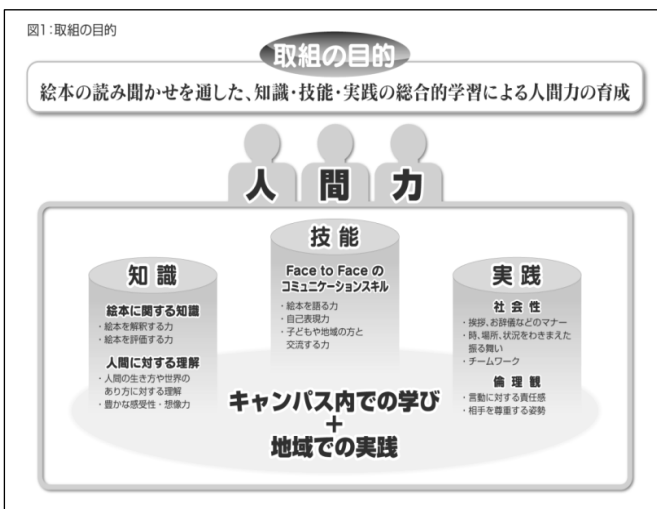
絵本について、内容をよく理解するための解釈力、読み聞かせの選書の際に必要なとされる評価力を培う。と同時に、絵本に描かれた世界を吟味することを通して、人間の生き方や世界のあり方について理解を深めるとともに、豊かな感受性や想像力を養う。

### 【技能】Face to Faceのコミュニケーションスキルの育成

読み聞かせの際に必要なとされる絵本を語る力（声の出し方・間の取り方・絵本の見せ方・絵本の持ち方・姿勢）、読み聞かせや合間の指遊びや歌などを人前で演じることによって身につく自己表現力、子どもや地域の方と円滑に交流する力、これらを総合して、Face to Faceのコミュニケーションスキルを育成する。

### 【実践】実践を通した社会性・倫理観の育成

地域での実践を通して挨拶・お辞儀などの基本的マナーや時・場所・状況をわきまえた振る舞い方を身につけるとともに、グループによる読み聞かせを行うことを通してチームワーク及びリーダーシップの力（信頼関係を築く親和力、目標に向けてチームの中で協調すると同時に、役割・責任を果たす協働力、組織全体を把握する統率力など）を培う。また、地域での交流の際には自分の言動に責任を持ち、自分の話に耳を傾けてくれる方々への敬意を忘れず、一市民として必要とされる社会性・倫理観を育成する。



## 2. 授業の概要

### 【科目の配置】

読み聞かせの実践（定期）の科目は、各学年に次のとおり配置している。松江キャンパスには、健康栄養学科、保育学科、総合文化学科の3学科がある。1年生の場合、3学科共通基礎科目として「読み聞かせの実践A」（前期・選択）、「読み聞かせの実践B」（後期・選択）がある。2年生の場合、総合文化学科に限られるが、卒業プロジェクト（卒業研究）のゼミの一つ「おはなしゼミ」（筆者担当）の活動として読み聞かせを定期的に行っている。もともと、1年生の「読み聞かせの実践」についても総合文化学科の学生のみを対象として開講していたが、平成21年度のGP選定を機に松江キャンパス全体の取組に拡大した。しかしながら、健康栄養学科に関しては、カリキュラムが過密であるため「読み聞かせの実践」の時間に他の必修科目が重なっており、必然的に読み聞かせの授業を履修できないのが現状である。

### 【受講者】

「読み聞かせの実践」の受講者数は、平成22年度前期36名（保育27、総文9）、後期22名（総文のみ）、平成23年度前期47名（保育のみ）、後期47名（総文のみ）である。総合文化学科2年生のおはなしゼミの履修者数は、平成22年度12名、23年度10名である。因みに、保育学科の定員は1学年50名、総合文化学科は1学年140名である。1年生に比べると、2年生で読み聞かせを行う学生の数は極めて限定的である。2年生で読み聞かせに取り組む10名ほどの学生のほとんどは、1年時に「読み聞かせの実践」を履修した学生で、読み聞かせに強い意欲を持った学生たちである。保育学科の2年生については読み聞かせの授業を開講していないが、保育実習の中で読み聞かせの経験を積む。

### 【実践先】

「読み聞かせの実践」の実践先は、松江市立幼保園のぎ、松江市立乃木小学校の2箇所である。幼保園のぎの園児数は206名（平成23年11月現在）、乃木小学校の生徒数は1003名（平成23年5月現在）と、いずれも規模が大きい。幼保園のぎでは、学生は2名1組になって、0歳児から2歳児までをまとめた1クラス、3歳児1クラス、4歳児3クラス、5歳児3クラスの計8クラスに毎回出かけて実践を行う。乃木小学校では、学生は一人が1クラスを担当し、毎回20名が出かけて20クラスで読み聞かせを展開する。平成23年度の場合、乃木小学校のクラス編成は5年生が4クラス、そのほかの学年は5クラスあり、毎回、ほぼ4つの学年で読み聞かせを行う勘定になる。なお、乃木小学校ではPTAの読み聞かせボランティア「ほんわかの会」も活動しておられ、学生と「ほんわかの会」を合わせると、毎回、ほぼ全クラスで読み聞かせを実践している。2年生のおはなしゼミの実践先は、松江市立忌部（いんべ）小学校と本学おはなしレストランライブラリーの2箇所である。忌部小

(34)

学校は1学年1クラスで、毎回全学年で読み聞かせを実践している。おはなしレストランライブラリーでは日曜日の午前に毎回学生2名が担当し、来館した親子連れを対象に実践している。

### 授業の概要一覧

科目	受講者	スタッフ	実践先	日時
1年共通基礎科目「読み聞かせの実践A」「読み聞かせの実践B」	各40～50名程度	教員3名 アシスタント2名	松江市立幼保園のぎ	5月～7月、11月～1月の 毎週月曜日10：30～11：30
			松江市立乃木小学校	5月～7月、11月～1月の 毎週水曜日8：20～8：30
2年卒業プロジェクトおはなしゼミ	10名程度	教員1名	松江市立忌部小学校	4月～7月、10月～1月の 毎週金曜日8：30～8：40
			おはなしレストランライブラリー	4月～2月の毎週日曜日 1100～11：30



幼保園のぎ



乃木小学校



忌部小学校



おはなしレストランライブラリー

### 3. 授業の工夫

絵本の読み聞かせを大学の授業として成り立たせるために、筆者らは試行錯誤を繰り返しながら、授業の方法について検討を加えてきた。ここでは、現在行っている授業のなかで特に工夫している方法として、「おはなしレストラン10ヶ条」「3種のノート」「多面的評価」の3つについて述べることとする。

#### 【おはなしレストラン10ヶ条】

「おはなしレストラン10ヶ条」とは、読み聞かせの実践における教育目標、すなわち、【知識】絵本や人間に関する知識と理解の育成、【技能】Face to Faceのコミュニケーションスキルの育成、【実践】実践を通じた社会性・倫理観の育成に促って、重要なポイントをコンパクトにわかりやすく10ヶ条にまとめて、学生に示したものである。

抽象的な教育目標をそのままのかたちで学生に伝えても、学生にとって手応えのある言葉とはなりにくく、敬遠されがちである。もっと平易な言葉、具体的にイメージしやすい言葉で、しかも学生が興味をもって聞いてくれるような方法はないものか。そこ



#### おはなしレストラン10ヶ条

##### 1. 絵本よ、きょうもありがとう

- 絵本を大切に扱う
- 借りた絵本の返却をしっかりとする（絵本はみんなの大切な活動資源）

##### 2. 絵から文へ、文から絵へ

- 文章を読む前に、まず絵を読み解く
- 文章と絵との結びつきについて考えてみる

##### 3. 自分の心で、子どもの心で

- 自分の心に響いてくるところ、子どもの心に響きそうなところはどこか、じっくり考える
- 子どもに伝えたいことを自分の中で明確にしておく

##### 4. 聞き手にあった本選び

- 子どもたちの心身の発達段階を頭に置いて、絵本を選ぶ

##### 5. 季節にあった本選び

- 絵本で描かれる季節感を大事にし、読む時と大きくズレないようにする
- 年中行事を題材にした絵本は、時期を見計らって効果的に取り入れる

##### 6. 絵本の持ち方、たいせつに

- 開きぐせをしっかりとつける
- 子どもたちから見やすい位置を確認する
- 横書きの本は右手、縦書きの本は左手で保持する
- 絵本がぶらつかないように脇をしめ、掌に本を寄せ、指でしっかりと保持する
- 画面を動かさない、手や体で絵を隠さない

##### 7. 絵本の読み方、たいせつに

- おはじまりをきちんと…表紙をしっかりと見せ、題名、作家名、画家名を読む
- 絵本が持つ雰囲気をしっかり押さえて、読み方を工夫する
- 明瞭に聞き取れる声の大きさに、気持ちをしっかりと乗せて読む
- 文と文の、ページとページのあいだの間の取り方に十分配慮する
- 子どもたちの反応を見ながら読む
- 自分ひとりだけで読む時よりもゆっくりめに
- 会話文や形容の部分が必要以上に演じない
- 伝えたい、強調したい言葉は、大げさにならない程度に半呼吸おいたり、ゆっくりめに読むと伝わりやすい（言葉を立てる）
- おわりをきちんと…「おしまい」「〇〇でした」
- 感想は言わない、尋ねない

##### 8. チームワークも味のうち

- 絵本の選定やつなぎについては、お互いの意見や考えを率直に出し合ってよく話し合う
- 組み合わせる2冊の絵本の長短、内容の軽重、明暗などのコントラストに配慮する
- つなぎの歌や手遊びは、ペアの二人の息が合うまでしっかりと練習する

##### 9. あいさつ身なりも味のうち

- 実践先でのあいさつは、出会う人みんなに、元気よく、大きな声で、はっきりとする
- 実践先での服装・髪型は、TPO（時・場所・場合）にふさわしいかどうか常に注意を払う

##### 10. みなさん、きょうもありがとう

- 聞き手の子どもたち、実践の場を提供していただいた先生方への感謝の気持ちを自分の言葉で表現する

で思いついたのが、この10ヶ条である。それぞれの項目には、語路のよい見出しをつけ、その下に具体的なアドバイスを列挙した。授業の初回にシラバスとともに学生に配布し、実践を終えて最終のまとめに入る段階で、学生はこの10ヶ条に基づいて自己評価を行う。それぞれの項目について、◎、○、△のいずれかで自分の取組を評価し、コメントを具体的に書き込んでいく。

### 【3種のノート】

1年共通基礎科目「読み聞かせの実践」では、実践を積み重ねていく過程で書き込む「作品解釈ノート」「実践プランノート」「実践記録ノート」の「3種のノート」を用意している。

「作品解釈ノート」は、実践の前に書くノートで、①読み聞かせで読む絵本の書誌情報、あらすじ、②好きなところと子どもに伝えたいところ、③読み聞かせをする際に工夫・注意する点についてまとめるものである。これらの情報を学生みずから書き留めることによって、読む絵本に対する学生の意識をより確かなものにするねらいがある。学生は読み聞かせの本番に臨むまでに、学内で他の学生やスタッフを相手に読みの稽古をするが、その際にも、このノートを参考にして、スタッフから学生にアドバイスをを行っている。

「実践プランノート」は、幼保園のぎに限って事前に利用するノートである。幼保園のぎの場合、2名が1組になって30分程度の実践を行う。30分の間に基本的に絵本を2冊読むが、それだけでなく、つなぎとして歌やクイズや手遊びを取り入れている。10分間の読み聞かせのみの乃木小学校とは異なり、幼保園のぎでは30分の構成が必要となってくる。実践プランノートは、その構成を考える際に利用するものである。

「実践記録ノート」は、実践の後に書くノートで、①読んだ絵本の書誌情報、②読み聞かせについて（作品解釈を活かした読みになっていたか、子どもたちの様子を見ながら読むことができたか、子どもたちの反応はどうだったか）、③挨拶、マナーについて、④感想と今後の課題の4点についてまとめる。幼保園のぎは、これ以外につなぎや全体のまとめについて記入する。学生は実践終了後にこのノートを提出し、スタッフがコメントを付けて返却し、学生は

### 作品解釈ノート

読み聞かせの実践		作品解釈ノート	
氏名		対象	歳・年
書名:			
文:			
絵:			
出版者:			
乳物・楕本:			
あ			
ら			
す			
じ	1. この作品で好きなおとこ、子どもに伝えたいところ		
	2. 読み聞かせをする際に、工夫したり注意したりする点		

次の実践に役立てていく。

以上のように、読み聞かせの実践では、3種のノートを活用しながら、計画から実践へ、実践から課題を見出し次なる実践へというサイクルをつくりだし、学生の課題探求能力を引き出しながら授業を動かしている。

### 【多面的評価】

1年共通基礎科目「読み聞かせの実践」の場合、学生は幼保園と小学校で合わせて6回程度の読み聞かせを経験する。その限られた実践のなかで、1回目よりも2回目、2回目よりも3回目と着実に力をつけ、学生自身も達成感を感じられるようにするにはどうしたらよいか。3種のノートもそのための工夫のひとつであるが、もうひとつの重要な方法として「多面的評価」がある。

スタッフが行う口頭での評価はもちろんのこと、そのほかに書面に残るものとして4種類の評価用紙を用意している。一つ目は読みの練習段階に学生同士で用いる「アドバイス用紙」、二つ目は3種のノートのうち自己評価とスタッフからのコメントを記入する「実践記録ノート」、三つ目は実践先の先生からのコメントを記入する「先生からひとこと～ふりかえりのために～」、四つ目は先にも述べた最終的な自己評価を行う「おはなしレストラン10ヶ条」である。「アドバイス用紙」は、よかった点と改善すべき点の両方を書いて本人に渡すようにしている。「先生からひとこと～ふりかえりのために～」は、「読み聞かせについて」「子どもに向かう姿勢・態度・マナーについて」の2点について、◎、○、△のいずれかで評価し、それにコメントを付けるようになっている。

### 実践プランノート

読み聞かせの実践 実践プラン（幼保園のぎ）		
班 名:		
班 員:		
実践予定日:	月	日
時 間	内 容	留 意 点
5分		
10分		
15分		
20分		
25分		
30分		
35分		
40分		

### 実践記録ノート

読み聞かせの実践 実践記録ノート（幼保園のぎ）				
班 名			氏 名	
チームメイト				
訪 問 日	月	日	訪問した クラス	組（ 歳）
1. 自分が読み聞かせをした絵本			チームメイトの読んだ絵本名	
書 名:			.	
文:			.	
絵:			.	
出版社:				
2. 読み聞かせについて				
1) 作品解釈を生かした読みになっていたか。				
2) 子どもたちの様子を見ながらの読みになっていたか。				
3) 子どもたちの反応はどうだったか。				
3. つなぎや全体のまとめについて				
4. あいさつ、マナー、など				
5. 実践を終えての感想・反省・次回の課題(具体的に、率直に)				
6. 教員より				





#### 4. 学生の評価・感想

読み聞かせの実践について、受講した学生たちはどのように評価しているだろうか。まず本学で行っている授業評価アンケートの結果をしてみることにする。1年共通基礎科目「読み聞かせの実践」について、平成22年度前期・後期、23年度前期のアンケート結果は次の通りである。なお、アンケート項目は多岐にわたるため、最も総論的な項目「総合的に評価してこの授業に満足している」についてのみ取り上げる。

22年度前期 36人中33人が「非常に満足している」、1.00（平均0.66）

22年度後期 22人中19人が「非常に満足している」、0.95（平均0.70）

23年度前期 47人中39人が「非常に満足している」、1.00（平均0.66）

右の数値は1.00を最高数値とした場合の値、括弧内は全科目の平均値

次に、同科目を受講した学生の感想を教育目標に沿って抜粋し、適宜コメントする。なお、下線は筆者が付した。

##### 【知識】絵本や人間に関する知識と理解の育成

「子どもが成長していく中で、絵本は本当に大きな役割を果たしていることを自分の目で確かめることができました。」（M・U）

「目がきらきらしているのはこういうことなんだと思えるくらい、子どもたちの目はいきいきとしていました。子どものときに出会う絵本はきっといろいろなものを与えてくれるものだと思います。本選びの大切さがよくわかりました。」

（A・M）

「最初の頃は『絶対おもしろくて、反応がある本を読みたい！』と考えていたけれど、今は『別に反応がなくても絵本の世界に入ってくれればいいんだー！』と思えるようになりました。」（A・N）

子どもからの反応を求めてウケねらいで絵本を選んでしまうことがある。この学生のように目に見えなくても心で感じてくれればよいと思えるようになったのは、それだけ自信をもって絵本を選び読み聞かせができるようになった証拠であろう。

「自分が選んだ本を好きになって読みこむことで相手にも伝えやすくなり、読み方も変わって伝わりやすくなると思うので、まずは自ら絵本を好きになることが大切だと感じました。」（A・I）

「自分が何か思いを持って選び読み進めると、子どもたちは真剣に聞き、何かを感じ取ってくれた表情をしてくれたので、やはり自分が子どもたちに伝えたいものをしっかり持って読み聞かせをすることが一番大切だと思った。」（A・A）

上記2つの感想は特に重要な指摘である。読み聞かせを通して教育をしたがる大人は、ややもすると自分自身の絵本の受け止め方をないがしろにして、もっぱら子どもにとってその絵本がどんな意味があるのかに腐心しがちである。読み手である

(40)

自分の心をほったらかしにして、はたして子どもにより読み聞かせが提供できるだろうか。子どもと絵本を結ぶ前に、まずは読み手である自分と絵本を結ぶべきであり、その前提なくしては、子どもに伝えたいものも見つからないはずである。

#### 【技能】Face to Faceのコミュニケーションスキルの育成

「人前で話すのが苦手なので最初の方は緊張したり、元気にできなかつたりしたけど、回数を重ねるごとにできるようになってきました。」(A・N)

読み聞かせの実践を受講する学生の中には、人前に出ることを苦手とする者もいる。中には、それを自覚するがゆえに、本授業で自分の殻を破ろうとして受講する学生もいる。授業を受ける以前よりも、ほんの少しでも苦手意識が克服できたとしたら、それは本人にとって大きな自信につながるのではないだろうか。

「子どもたちは何事に対しても本気でぶつかってくるので、とてもやりがいがあり、楽しかったです。そのかわり、反応も素直なので、面白くない時はつまらなそうな顔をされるので、そんな時はショックで、次はみんなが楽しいと思えることをしようと強く思いました。」(M・G)

子どもはごまかしがきかない。実践を重ねながら、学生は生身の人間を相手にコミュニケーションをとることの難しさと喜びの両方を肌身をもって経験する。

#### 【実践】実践を通した社会性・倫理観の育成

「読み聞かせ以外での行動が与える印象は大きいと思います。感謝の気持ちを込めてあいさつすることが大事だと思いました。」(A・M)

「あいさつや身なりに気をつけていましたが、あいさつの面で注意を受けました。注意されたことで、さらに意識するようになったので良かったです。」(K・M)

挨拶やお辞儀、身なりなど、基本的なマナーが身につけている学生はそれほど多くない。こちらが何も言わなければ、実践先に行くのにサンダル履きにジャージで平気な学生もいる。読み聞かせの指導と同等かもしくはそれ以上に、これらの指導に気を遣っているのが実情である。

#### 【全般】

「実践に向けて、毎回2人で意見を出し合ったり、お互いを評価しあうことができ、実践を重ねるごとに、お互いの成長を感じることができました。」(H・O)

「読み聞かせという形で人前に出てみて、自分がどういう風に見られるのかがわかったという意味でも実践はとても貴重なものだったし、大きな言い方をすれば、人間としての成長の一步につながったんじゃないかと思います。」(Y・K)

感想の中に、「成長」の2文字を書く学生は多い。この実感こそが、授業評価の満足度につながっていると思われる。

## 5. 今後の課題

### 【クラス担任の先生方の協力】

幼保園のぎ、乃木小学校では、クラスの担任の先生も子どもと一緒に読み聞かせを聞いていただき、「先生からひとこと～ふりかえりのために～」に評価・コメントを書いてもらうことになっている。

本実践では先述の通り多面的な評価を採用しているが、様々な視点からの評価の中でも、とりわけクラス担任の先生からの評価は学生にとって「こたえる評価」となっている。先生からのコメントを読んでいる時の学生の表情には、先生からの評価が高かったのか低かったのかが如実にあらわれている。本実践で幼保園、小学校の先生方が学生に与える影響は非常に大きい。

実践が始まれば、毎週、幼保園では8クラス、小学校では20クラスで読み聞かせを展開する。学生たちは、様々な子どもたちに出会うと同時に、様々な先生方にも出会う。先生方のコメントや考え方に励まされる一方で、時に戸惑いや悩みを抱えてしまうこともある。

例えば、読み聞かせをする時には子どもたちにはできるだけ前に集まって聞いてもらいたい。それはもちろん絵が見えやすいように、声が聞き取りやすいようにするためである。幼保園ではそれは徹底されているが、小学校ではこれがなかなか難しいのである。クラスによっては、子どもたちは普段通り席について聞いている。これは子どもたちが絵本を享受しにくいだけでなく、学生にとっても子どもたちの反応を受け止めにくい環境である。しかし、先生の中には、高学年では特に絵は見えなくても声だけ聞くことができればいいという考えの方もおられる。

また、これは1年生のクラスに学生が入った時のことである。読み聞かせを始めて、ある場面で子どもたちが声をあげて笑った。その時、担任の先生がひとこと、「何がそんなにおかしいの」とびしゃりと言われた。学生は、その場面はいかにも愉快で、笑いが出るのがむしろ自然だと思っていたので、先生の言葉に「なんで」と思ったという。ともかく、先生のそのひとことで、以後子どもたちは笑わず、静まり返り、学生も気持ちが入らないまま言葉を口から出しているだけ、ただページをめくるだけの読み聞かせになってしまった。これほど極端ではなくても、先生の中には子どもたちが読み聞かせの最中に声を出すことをことさら気にする方が少なくない。たしかに、読み聞かせをしている最中に子どもたちが私語をしたりすると、読み手は読みづらいものだ。しかし、私語と笑いは自ずから性質が異なる。おかしい場面で笑ったり、つい驚いて「うわあ」と声が出たりするのは、それはほとんど生理的な反応で、我慢させるべきことではない。読み手も、そういう笑いや驚嘆を受け止めることによって、ますます読みに熱が入っていき、子どもたちと絵本の世界に浸ることができる。

もう一つ、これは5年生のクラスで起きたことである。そのクラスの読み聞かせ

に学生が選んだのは、『マリールイズいえでする』（N. S. カールソン作、J. アルゴ、A. デューイ絵、星川菜津代訳、童話館出版）という絵本だ。マンガースの女の子マリールイズは、いたずらばかりして、お母さんに叱られ、とうとう家出をする。お母さんは自分のことが嫌いだから、よその家の子どもになろうということで、ほかの動物たちの家を訪ね歩くのだが受け入れられず、最後にはやっぱりもとのお母さんがいちばんということで帰って行くおはなしである。担任の先生からの評価用紙には、学生の読み聞かせというより、その絵本に対する厳しい意見が書かれていた。担任の先生が問題視されたのは、動物の家を訪ねるたびに主人公が口にする、「うちのかあさんは、もうあたしのこと、きらいなの」という台詞である。クラスにはいろんな家庭環境の子どもがいる。母親に対して否定的な言葉を繰り返す本書は読み聞かせにふさわしくないというものだった。学生が読み聞かせに選んだ絵本については、実践前にあらかじめスタッフがチェックをしており、その段階で本書に問題があるとはもちろん考えていなかった。先生からのクレームを受け取り、スタッフ5人は、再度本書について検討を行なった。しかし、私たちスタッフには、この絵本が読み聞かせにふさわしくない理由を見つけることはできなかった。最終的に、小学校の司書教諭の先生と学校司書のおふたりとこの絵本について話し合う機会を持ったのだが、おふたりとも小学校で読み聞かせをするのにはふさわしくない絵本であるという意見であった。そして、私たちは、『マリールイズいえでする』は今後小学校では読まないことにした。

そのほかにも、絵本に対する意見は時々先生方からいただく。暗いおはなしはできるだけやめてほしい、両親がそろっていないおはなしを読むのはいかがなものか、などである。いずれも、クラスの子どものことを思っただけのご意見であろう。しかし、本当にそうだろうか。暗い話や両親がそろっていない話、子どもがお母さんのことを嫌いと言い続ける話は、読むべきではないのだろうか。明るい話、両親も兄弟もそろった円満な家庭を描いた話、お母さんのことを嫌いだなんて言わない子どもの登場する話、そういうハッピーな話だけを子どもたちに与え続けることが、子どもの成長を促す力となるのだろうか。筆者には、むしろ逆に思えて仕方がない。

読み聞かせや絵本に対する価値観は多様である。クラスによって、担任の先生によって、様々な反応が返ってくるのは、むしろ自然なことである。上記のように意見が対立することも当然ありうる。その多様性は、いろんな絵本が読まれるべきであるのと同様に、基本的に受け入れられるべきである。すべてのクラスで統一したスタイルで読み聞かせを行うことに努力を傾けるよりも、先生方からの様々な反応に悩む戸惑う学生を支えることに力を注ぐべきである。読み聞かせの実践を受講したおかげで読み聞かせが嫌いになったのでは、この授業の存在意義はない。

### 【10分という枠】

乃木小学校、忌部小学校ともに、朝の読み聞かせに与えられた時間は10分間であ

る。10分以内で読むことのできるすぐれた絵本ももちろんたくさんある。しかし、10分では読みきることのできない絵本もまた多い。特に高学年になるにつれて、比較的長めで読み応えのある絵本を提供したくなる。せっかく学生がいい絵本を見つけても、時間の制約上諦めざるをえないケースもよくある。これが15分だと、絵本の選択の幅もぐんと広がる。学校によっては、15分、あるいは20分の時間を読み聞かせにあてているところもある。学校それぞれに事情があるだろうが、週に1回、朝の15分の枠を確保できるよう協議していきたい。

#### 【絵本について話し合う時間の不足】

本番に備えて読み聞かせの練習を行う際の問題点として、絵本についてじっくり話し合う時間が不足していることがある。学生は、「解釈ノート」に選んだ絵本のあらすじや魅力をまとめながら、その絵本に対する理解を深めていく。それは、学生本人がよりよい読み聞かせをするうえで一定の役割を果たしているものの、個々の解釈が共有化される機会は少ない。「解釈ノート」は、学生が練習する際にスタッフがチェックすることになっているが、学生が書いている絵本の解釈について、それを話題にしたりさらに深めることはほとんど出来ていない。1冊の絵本を囲んで、その絵本の特徴や魅力についてじっくり話し合う時間を設けることができるように工夫する必要がある。

#### 【授業のマンネリ化】

読み聞かせの授業内容をごく簡潔に述べれば、読み聞かせの練習と実践本番の繰り返しである。幼稚園と小学校のシフトを組んで、練習を積んでは順次実践に送り出す。授業は月曜日の朝9時からの2コマ(90分×2)を確保しているものの、上にも記した通りゆとりはなく、3時間があつと言う間に過ぎていく。授業の打ち合わせは授業時間外に行っており、時々の問題点などを検討しながら進めている。しかし、授業がいったん走り始めると、途中で大きな変更をするわけにもいかず、ある程度流れに乗じて運営していかざるを得ない。これを毎年、しかも前期・後期で反復して行っていると、「こなしている」感覚を覚える時がある。おそらく、重要なのは授業をたえず更新していくこと、出来上がった形をいったん壊す勇氣を持つことである。そのためにも、できるだけ外部からの視点でこの授業を厳しく評価していただく必要がある。

#### 【「読み聞かせ」か「読み語り」か】

近年、学校などで、「読み聞かせ」をそうは言わずに「読み語(がた)り」と呼ぶところが増えている。それだけなら特に意見はないが、「読み聞かせ」という言葉に対して批判を受けることがあるので、私たちおはなしレストランの考えを表明しておきたい。

「読み聞かせ」に対する批判の理由は「聞かせ」の部分にあつて、子どもたちに強制している響きがあつてよろしくないというものである。もしも、私たちの実践

(44)

において、子どもに無理やり読み聞かせを強要し、子どもに苦痛を与えているような事実があれば、これはまことに問題である。しかし、実態を無視して、「読み聞かせ」という名のみを批判するのであれば、その批判にさほどの意義は認められない。言葉の表層的な意味だけを捉えて、使用を禁じるような動きをとるのは一種の言葉狩りであり、危険な傾向ですらあると考えている。また、「読み聞かせ」にかかわって使われている「読み語り」という言葉の意味が、実はよくわからない。読んで語るという言葉から、具体的なイメージが湧いてこないのである。それとも、ただ似通った語を繰り返しているだけなのか。いずれにしても「聞かせ」を忌避して適当に語路のいい「語り」をくっつけたという感が否めない。私たちは「読み聞かせ」という語に固執しているわけでは決してないが、「読み語り」に鞍替える積極的な理由も見出せないのである。

### おわりに

うれしいニュースがあった。「読み聞かせの実践」を受講した学生の一人が4年制大学に編入し、そこで仲間を募って読み聞かせのサークルをつくり、小学校で活動しているという。おはなしレストランで修行を積んだシェフが巣立って自分の店を出したような感じである。おはなしレストランのスタッフにとって、大きな励みである。

1台の本棚に絵本を1冊また1冊と買いためながら活動していた頃と比べて、今は蔵書も圧倒的に増え、授業の規模は格段に大きくなった。慢心せず、1回1回の読み聞かせを大切にしながら、今後も着実に実践を積み重ねていきたい。

読み聞かせの定期的な受け入れ先となつていただいている松江市立幼保園のぞ、松江市立乃木小学校、松江市立忌部小学校には心より感謝申し上げるとともに、今後も引き続きご支援いただき、絵本を介した学生と子どもとのつながり、学校同士のつながりを大切に育んでいきたい。

なお、本稿は、第29回島根大学教育学部国文学会研究発表会（2011年8月6日、島根大学学生会館）での発表「フォーラム わたしの国語教室—より豊かな読書指導を求めて—」に基づくものである。ご意見をいただいた皆様に感謝申し上げます。